

きている人々にも手を差し伸べたいと思います。そして、死者に名誉あれ、という言葉に、さらにこう付け加えたいと思います——善意あるすべての生者に平和あれ」

医療や福祉の最前線で闘う人、病と闘う人、彼らへの称賛とともに、まずしさと闘う人、従業員のために闘う人、そして、苦悩し、日々を生きる善意あるふつうの人たち、すべての人びとに平和を。苦悩し、意味を見だし、痛みを乗り越えていくすべての人間たちに祝福を。

いで えいさく 財政社会学者。慶應義塾大学経済学部教授。1972年、福岡県生まれ。東京大学卒業。東京大学大学院博士課程単位取得退学。専門は財政社会学、財政金融史。日本銀行金融研究所勤務などを経て現職。『経済の時代の終焉』（大佛次郎論壇賞）『幸福の増税論』『いまこそ税と社会保障の話しよう』『ソーシャルワーカー』（共著）など著書多数。

■ 酒井邦嘉（言語脳科学者）

『蜜蜂と遠雷（上・下）』

恩田陸／幻冬舎文庫

「自然は優しく人間を包んでくれているだけではない。むしろ、古来より人間を打ちのめし、常に絶滅の一手手前まで人類を追いこんできたのだ」という小説内の言葉は厳しい。しかしミクロコスモスたる人間には、音楽という救いがある。音は「いつもその一瞬だけで、すぐに消えてしまう。でも、その一瞬は永遠で、再現している時には永遠の一瞬を生きる

ことができる」、それが演奏なのだ。そして、ピアノコンクールという過酷な状況でも互いに感化し合い、高め合う若者たちの何と清々しいことか。音楽の意味をこれほどまでに突き詰めた作品は希有である。引用曲の音源を聴きながら（映画化された四人の演奏も素晴らしい）、丹念に読みたい。アンコールには、スピンオフ短編集『祝祭と予感』を。これにまさるカンフル剤はないと思う。

『絶品！ 4 × 4 マスの詰将棋』

伊藤果／マイナビ将棋文庫

テレワークやネット会議に疲れ、一人で煮詰まったり、孤独感に苛まれたりする時には、孤高のソリティア「詰将棋」がある。駒の動かし方を知っていても詰将棋には縁遠かった人には、究極の一冊。著者自ら「箱庭」と呼ぶ、4 × 4 の限られた枠内の初期配置から、詰将棋の魅力が溢れ出す。まずは第1章の3手詰めから。中級者は問題図を記憶して、暗算（図や盤を見ずに脳内で解くこと）に挑戦してみたい。これぞ指し将棋に強くなるための極意でもある。詰将棋解答選手権・チャンピオン戦（今年は残念ながら中止）で5連覇中の藤井聡太七段も、「箱庭」作品をいくつか創っており、今後が楽しみだ。

『盤上のフロンティア』

若島正／河出書房新社

現代を代表する詰将棋作家による、最新の作品集。著者自ら「詰将棋にはまだまだ未開拓のフロンティアが広がっている」、「将棋盤という一見狭そうに見える世界は、とても一人では探索しきれないほど広大なのだ」と語る。この本の素晴

らしさは、「自分で問いを立て、自分でその答えを見つける」という創作の過程が惜しみなく言語化されていることにある。そして、「詰将棋では、現実には起こらないようなことでも、必ず実現できる」という力強い言葉に勇気づけられる。江戸時代には『将棋無双』や『将棋図巧』のように、創造的で奥深く、そして芸術的で美しい図式集があった。閉ざされた環境で、しかも制約が大きければ大きいほど研ぎ澄まされる人間の創造力の極致を鑑賞したい。

さかい くによし 言語脳科学者、東京大学大学院教授。1964年生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。1996年マサチューセッツ工科大学客員研究員、2012年より現職。第56回毎日出版文化賞、第19回塚原仲晃記念賞受賞。脳機能イメージングなどの先端的手法を駆使して人間にしかない言語や創造的な能力の解明に取り組んでいる。著書に『チョムスキーと言語脳科学』『言語の脳科学』『科学者という仕事』『脳の言語地図』（明治書院）など。

春日武彦（精神科医・作家）

『人生の段階』

ジュリアン・バーンズ、土屋政雄訳／新潮クレスト・ブックス

不安と恐怖、得体の知れぬ気味悪さ、人影の消えた繁華街のシュールな眺め、対岸の火事めいた非現実感と医療現場の生々しさとの対比——まったくのところ、コロナはわたしたちを困惑させる。おそらく今後、人類は変異を重ねるコロナウイルスと危うい共存を図っていかなければならないだろう。それが未来永劫続く。そんなことを考えると、じわじわと無